

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究(A)
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21242019
 研究課題名（和文） 旧日本植民地・占領地関係資料ならびに原爆関係資料のアーカイブズ学的研究
 研究課題名（英文） Archival Research on the Records Relating to the Former Japanese Colonies, Occupied Territories and the Atomic-Bombs
 研究代表者
 安藤 正人 (ANDO MASAHITO)
 学習院大学・文学部・教授
 研究者番号：90113422

研究成果の概要（和文）：20世紀という激動の時代の記憶と記録を収集・保存し後世に伝えることが、平和な未来を築くために極めて大切であるという認識から、本研究では、(1)アジア太平洋戦争を中心とした日本の戦争及び占領地関係記録の伝存過程を国内外の調査によって明らかにするとともに、(2)朝鮮を中心とした日本の植民地支配に関わる記録の所在調査とオーラルヒストリーの収集を実施し、さらに、(3)米国を中心とした広島・長崎原爆被害関係資料の調査と収集を行った。研究成果の多くは、論文・学会報告などで公表している。

研究成果の概要（英文）：It is extremely important to preserve memories and records of the 20th Century, which was a very tempestuous period, in order to create the future peace. Based on this point of view, the present study has: (1) clarified a part of archival history of the records relating to the Japanese war and occupation of Asian countries during the Asian-Pacific War period; (2) surveyed the records relating to the Japanese colonial rules, especially in Korea, and also collected related oral records; and (3) made an archival research, mainly in the United States, on the records relating to the Hiroshima-Nagasaki Atomic-Bomb casualties and collected a part of them. A part of the fruits of the project has been opened by articles and academic presentations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2010年度	9,500,000	2,850,000	12,350,000
2011年度	9,500,000	2,850,000	12,350,000
2012年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
年度			
総計	35,100,000	10,530,000	45,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：戦争、植民地、占領地、原子爆弾、核兵器、アーカイブズ、記録、情報

1. 研究開始当初の背景

20世紀という激動の時代の記憶と記録を収集・保存し、後世に伝えるアーカイブズ活動の重要性が世界的に指摘されている。とりわけ、アジア侵略と被爆体験という過去を持つ日本が果たすべき役割は大きい。日本は本格

的な現代史アーカイブズを設立して国内外の人々に研究資源を提供し、世界平和の構築に貢献すべきである。

20世紀現代史は3つのキーワードで捉えることができる。2度にわたる世界戦争に代表される「戦争」、帝国主義諸国による植民地支

配に象徴される「支配」、そして核兵器の出現と冷戦後の核拡散であらわされる「核」である。この3つのキーワードは日本の現代史とも密接に関わっており、日本独自の視点からこれらに関わる記憶と記録をアーカイブズとして保存し後世へ伝えることは、国際的にもきわめて重要である。

第一の「戦争」に関する記録についていえば、日本では国立公文書館アジア歴史資料センターによる資料のデジタル画像提供サービスや、「日本占領期資料フォーラム」によるオーラルヒストリーの収集・出版活動が先駆的な取り組みとして知られている。しかしアーカイブズ学的研究としては、本研究の研究代表者安藤正人を中心とした平成14～16年度科研費基盤研究(A)「旧日本植民地・占領地におけるアーカイブズ政策と記録伝存過程の研究」、研究協力者前川佳遠里による平成19～21年度科研費若手研究(A)「東南アジア諸地域との太平洋戦争関係歴史記録情報の共有化モデル構築に向けた研究」などがあるに過ぎない。現在、アジア太平洋戦争と日本軍に関する資料所在への関心は、オランダの「戦争の遺産」プロジェクトのように欧米にも広がっており、また東南アジア諸国でもオーラルヒストリーを含むアーカイブズ構築への取り組みが進められている。日本としても、これらの動きに協調して戦争関連記録の伝存過程に関するアーカイブズ学的研究と、それをもとにしたアーカイブズ情報の整備にもっと積極的に取り組む必要がある。

第二の「植民地支配」に関する記録については、1990年代以降、韓国・台湾での民主化の進展及び中国での改革開放政策、さらにはソ連邦の崩壊によって、かつて日本の植民地であった地域に現存するアーカイブズが明らかになった。国内研究者による現地調査も盛んになったが、アーカイブズ所在情報は必ずしも一元化されていない。一方、韓国や台湾などの研究機関・研究者も日本国内のアーカイブズ所在情報の把握と収集を行っているが、日本側との情報の相互交換と共有化は図られていない。かかる状況を改善するため、研究代表者安藤正人を中心して平成17～20年度科研費基盤研究(A)「朝鮮総督府文書を中心とした旧植民地関係資料の共用化に関するアーカイブズ学的研究」を実施した。その結果多くの植民地関係資料の所在が明らかになり、今後も継続して、より組織的に植民地関係資料のアーカイブズ学的研究と情報共有化を進める必要があることが痛感された。

第三の「核」をめぐる記録についても、研究は立ち遅れている。広島・長崎への原爆投

下後、日本政府は「陸軍省救護調査団」「原子爆弾災害調査研究特別委員会」を結成して被害調査と記録作成を行った。米側もマンハッタン管区調査団、陸・海軍調査団、戦略爆撃調査団、「原爆の効果に関する合同調査団」などを組織して調査を実施し、1947年に設置されたABCC(原爆傷害調査委員会)が放射線の長期的影響についての調査研究を引き継いだ。日本人研究者が広島・長崎で収集したものを含み、これら諸機関の原爆被害調査資料は多く米国へ移送された。カルテや病理標本など一部は日本に返還され、放射線影響研究所、広島大学、長崎大学などで他の多様な原爆被害調査資料と共に保管されている。これら日米両国に残存する原爆被害調査資料は、いずれも全体的な学術調査が行われておらず、情報の集約と長期的な保存体制の確立が今後の大きな課題である。加えて、日本での原爆被害調査に参加した米国人研究者の高齢化が進み、調査の経緯や資料についての証言記録の作成も急がれる。

以上が、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、前記の3つの切り口を基軸として、(1)戦争の記憶と記録、(2)支配の記憶と記録、(3)核時代の記憶と記録、の3研究チームを設け、以下の3つの課題を明らかにすることを目的とした。

【第1課題】アジア太平洋戦争を中心とした日本の戦争及び占領地関係記録の伝存過程の解明、【第2課題】東アジア地域における植民地支配に関わる記録の共同調査、【第3課題】米国所在記録を中心とした広島・長崎原爆関係資料の調査と保存モデルの構築

【第1課題】では、まず欧米や東南アジア諸国で収集、整理、公開されているアジア太平洋戦争期の日本軍ならびに日本軍政関係資料に焦点を当て、概要情報を集約するとともに各資料群の伝存過程を分析・解明してアーカイブズ学的な情報記述を行い、これをデータベース化することを目的とした。このため、欧米ならびに東南アジア諸国の公文書館や関係機関を訪問し、アーキビストの協力を得て関連資料群のアーカイブズ学的調査を行うこととした。とくに国際赤十字委員会アーカイブズ(ジュネーブ)、オランダ戦争資料館(アムステルダム)、米国立公文書館などと連携を図り、インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ベトナムなどにおいても、これまで培ってきたアーキビスト・ネットワークを活用して情報を収集し、資料群の伝存過程を解明することを目指した。

【第2課題】の場合もほぼ同様で、これまで蓄積してきた研究成果と人的ネットワーク

を活用して、日本・韓国・台湾における植民地支配に関わる文書記録や関係者による口述記録を国内外の研究者の連携によって積極的に調査収集し、最終的にはアーカイブズ概要記述の国際標準に準拠した日・韓・台を結んだ総合的アーカイブズ・ガイドを作成することを目的とした。

【第3課題】では、当面、米国内の原爆・放射線被害関係資料に焦点を絞り、研究機関や公文書館等が所蔵する関係資料の所在情報と概要情報を調査・収集し、アーカイブズ学の国際標準に依拠して分析・記述し、これを集約することを目的とした。また、米国内に在住する、原爆被害調査に関わった研究者のインタビューを実施し、機関資料の所在や移動について明らかにするとともに、現在も個人が保管している資料の調査を実施して、これを集約することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、(1)戦争の記憶と記録、(2)支配の記憶と記録、(3)核時代の記憶と記録、の3チームによって実施し、各国公文書館等の現地調査と資料収集、ならびに共同研究会活動を主な柱として実施した。各チームの研究課題と研究対象地域は相互に重なり、また最終目的は、いずれもアーカイブズ学的手法による資料情報の集約にあるので、チームメンバーは固定せず、合同調査を適宜実施した。以下、チームごとに研究方法の概略を記す。

(1)「戦争の記憶と記録」チーム

①資料調査：ターゲットを日本の東南アジア占領に絞り、他のチームと協力しながら東南アジア諸国において資料調査を実施する。また、欧米関係諸国において、日本の東南アジア占領に関する資料調査を実施する。とくにオランダについては現地研究機関との密接な連携を図る。また、国際赤十字委員会などの国際機関、ならびに交戦国利益代表国としての中立国の活動に関する記録状況を明らかにするため、スイスとスウェーデンにおいて資料調査を実施する。

③情報の集約と分析、記述：チームによって調査・収集された情報やデータは、研究組織全員で共有化を図り、アーカイブズ学的な共同研究にもとづいて目録記述を試みる。

(2)「支配の記憶と記録」チーム

①資料調査：他のチームと協力しながら、韓国・中国・台湾ならびに米国など関係諸国において資料調査を実施する。とくに米国においては、国立公文書館以外に、大学図書館や研究機関が旧日本植民地に関連する個人文書を所蔵している例が多いので、重点的な調査

を実施し、写真撮影等による情報収集を行う。

②オーラルヒストリーの収集：引揚者団体等の協力を得ながら、旧朝鮮在住者から口述記録の収集を実施する。

③情報の集約と分析、記述：チームによって調査・収集された情報やデータ（オーラルヒストリーを含む）は、研究組織全員で共有化を図り、アーカイブズ学的な共同研究にもとづいて目録記述を進める。

(3)「核時代の記憶と記録」チーム

①資料調査：国外では、米国の資料所蔵機関に焦点を絞り、米国の研究協力者と密接な連携を図りつつ、原爆・核兵器関係資料の所在調査と情報収集を実施する。必要に応じ重要資料のデジタル化による収集を実施する。国内でも、広島・長崎において資料調査を行う。

②オーラルヒストリーの収集：米国科学アカデミーやテキサス医療センターと協力し、日本で原爆放射線被害調査に携わった米人科学者の聞き取り調査を実施する。

③情報の集約と分析、記述：チームによって調査・収集された情報やデータは、研究組織全員で共有化を図り、アーカイブズ学的な共同研究を進める。また、原爆関係資料情報の国際的共有化に向け、米国の研究協力者と共同研究にもとづいて目録記述を進める。

4. 研究成果

(1)「戦争の記憶と記録」チームの成果

国外資料調査と情報収集の実績は次の通りである。まず、東南アジアでは、タイ（国立公文書館他、2009年）、インドネシア（国立公文書館他、2009年）、ベトナム（国家記録アーカイブズ管理局第1・第2・第3アーカイブズセンター、2010・2011・2012年）において、日本の東南アジア占領に関する資料調査を実施した。ヨーロッパでは、オランダ（国立公文書館、オランダ赤十字委員会、国防省戦史研究所、国防省蘭印軍博物館、2011年）、スイス（国際赤十字委員会、国際連盟アーカイブズ、国際連合欧州本部アーカイブズ、2011年）、同（スイス連邦公文書館、2012年）、スウェーデン（国立公文書館、2012年）において、第2次世界大戦期およびGHQ占領期の日本軍関係資料、ならびに中立国の交戦国利益代表国としての外交活動に関する資料等の調査を実施した。成果の一部は論文として公表し、目下、収集情報の集約を進めている。

(2)「支配の記憶と記録」チームの成果

国外資料調査と情報収集の実績は以下の通りである。最も重点を置いたのは米国に所在する資料で、コロンビア大学図書館（個人文書を含む朝鮮関連資料、国民党関係者を中心とする近代中国関係資料等、2009、2012年）、

ハーバード大学燕京図書館（在韓米軍政庁関係者個人文書、2009年）、米国立公文書館（朝鮮関連資料、2009年）、米国会図書館（朝鮮関連資料、2009年）、米国立公文書館シアトル分館（アジア系移民関係資料、2010年）、スタンフォード大学フーパー研究所（「篠田治策文書」ほかの日本関係資料、韓国・中国関係資料、2010年）、トルーマン大統領図書館（日米戦および日本占領関係文書、対アジア政策関係個人文書等、2011年）、マッカーサー記念館（同前、2011年）、イェール大学バイネキー図書館（旧植民地関係資料、2012年）において、資料の調査と目録作成ならびに一部資料の写真撮影を行った。

次に韓国では、鬱陵島の鬱陵公共図書館において鬱陵島関係の地方誌史の収集を行い、独島博物館および鬱陵郡資料室では、植民地期から戦後初期にかけての鬱陵島および在住日本人関係資料の調査収集を行った。

国内では、「今吉敏雄文書」、「松木幹一郎文書」（2011年）、仙台市立博物館所蔵「松川敏胤文書」（2012年）など、旧植民地関係者の個人文書の調査、収集、目録作成を行った。また、朝鮮引揚者、京城師範学校附属単級小学校同窓生等からの口述記録の収集を実施した（2011、2012年）。

本チームに関わる研究交流活動の大きな成果としては、2009年12月20日に日本アーカイブズ学会と共催し、立教大学（東京）において、シンポジウム「帝国の拡大とアーカイブズ」を開催した。報告は、「問題提起：帝国の支配構造とアーカイブズ制度一連関性と補完性の視座一」（加藤聖文）、「辺境に蓄積するアーカイブズ—内国植民地北海道の文書における国家と地方一」（鈴江英一）、「対馬島庁設置の史料学的接近」（高江洲昌哉）、「台湾総督府文書のアーカイブズ学的研究—皇太子訪台関係文書を中心に—」（東山京子）、「朝鮮総督府が作成した土地関係帳簿の種類と性格」（崔元圭）、「旧帝国と旧植民地記録の再認識」（金慶南）であった。

本チームの成果の一部は論文等で公表し、現在、収集情報の整理と分析を進めている。

（3）「核時代の記憶と記録」チームの成果

国外資料調査と情報収集の重点は米国に置き、以下の成果をあげた。まずワシントンD.C.地域では、2009年に総合研究大学院大学葉山高等研究センターの「戦争と平和」研究プロジェクトとも連携して、米国科学アカデミー・アーカイブズ、米軍病理学研究所、国立公文書館、米議会図書館において「原爆被害調査委員会」（ABCC）関係資料その他の原爆放射線被害関連資料の調査を実施した。またテ

キサス医療センター図書館アーカイブズ（ヒューストン）において、2010年と2011年の2回、広島・長崎のABCCに勤務した米人科学者の個人資料コレクションを調査し、今後の共同利用等について協議を行った。

上記の米国調査の成果として、米国科学アカデミー・アーカイブズが所蔵するABCC資料（124箱、約14万頁）をデジタル化により収集することになり、同アーカイブズと契約書を交わした上で、米国の業者に委託して、2010年度より3年計画でデジタル撮影を行った。

国内調査としては、2012年に広島大学原爆放射線医科学研究所、長崎大学原爆後障害医療研究所等において、原爆関係資料の保存状況調査と研究者との協議を行った。

次に、オーラルヒストリー収集事業として、日本国内では、濱清（元国立生理学研究所、2009年）、土山秀夫（元長崎大学長、2009年）、田川千鶴子（永井隆博士の長崎医大第11救護隊元看護師、2010年）、石崎可秀（元京都帝大医学部原爆調査団学生隊員、2011年）の各氏から、原爆被害救護ならびに調査活動に関わる聞き取り調査を行った。また国外でも、2010年に米国ヒューストンにおいて、ウィリアム・シャル博士（元ABCC職員で元放射線影響研究所副理事長）、2010年に台湾台北において、楊敏卿氏（永井隆博士の長崎医大第11救護隊元副長）の聞き取り調査を実施した。

本チームの行った研究集会としては、まず2010年10月13日に、高エネルギー加速器研究機構（つくば市）と協力して研究集会「日米のサイエンス・アーカイブズを語る」を開催し、トモコ・スティーブン博士（米国会図書館）の講演と「シンポジウム・原爆アーカイブズの構築に向けて」を行った。次に、2011年10月20日に、学習院大学において国際シンポジウム「核時代の記憶と記録—原爆アーカイブズの保存と活用—」を開催した。報告は、「国を超えての原爆アーカイブズの保存」（高橋博子）、「核時代の記憶としてのテキサス医療センター図書館 ABCC コレクション」（フィリップ・モンゴメリ）、「原爆傷害調査委員会（ABCC）科学者コレクションの重要性」（ウィリアム・J・シャル）の3本であった。

以上のほか、2012年に米国サンディエゴで開催された米国アーキビスト協会年次大会に研究協力者前川佳遠理が参加し、原爆放射線被害デジタルアーカイブズ構築のための国際コンソーシアムについて構想を発表するとともに、テキサス医療センター、米国科学アカデミー等、関係機関の研究者と協議を行った。

以上の本チームによる成果の一部は論文、報告書等で公表し、引き続き収集情報の集約を進めているところである。

(4) 成果のまとめと今後の課題

本研究は、旧日本植民地・占領地関係資料ならびに原爆関係資料を対象としたアーカイブズ学的研究であり、その最終的な目的は、これら資料の適切な保存・活用の体制を確立することである。この最終目的を達成するためには、なお国内的・国際的な努力が必要だが、本研究はその土台作りとしての成果をあげることができた。ポイントは以下の3点。

①旧日本植民地・占領地関係資料ならびに原爆関係資料の所在情報を数多く収集した。その一部は論文等で公表しているが、多くはアーカイブズ学的手法によって情報の集約、分析、記述を進めている段階であり、できるだけ早く公表したい。また、資料の接収、破壊、散逸等についての調査研究も一定の成果をあげており、公表を急ぎたい。

②オーラルヒストリーについては、数多くの貴重な口述記録を収集した。公表と利用の方法については、なお研究が必要があるが、できるだけ早く適切に公開していきたい。

③本研究の大きな成果の一つは、米国科学アカデミー所蔵 ABCC 資料をデジタル化により収集するとともに、この事業をきっかけとして、米国内のアーカイブズ機関との間で、原爆被害関係資料の日米相互利用について国際的な共同研究の素地が生まれたことである。この国際共同研究を進めるため、新規に科学研究費補助金基盤研究(A)「国際コンソーシアムによる『原爆放射線被害デジタルアーカイブズ』の構築に関する研究」(研究代表者安藤正人)を申請したところ、幸いにも採択され、すでに2013年度から研究が開始されている。今後、この新しい研究プロジェクトを進めるなかで、ABCC資料など本研究の成果を本格的に活用していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13)

- ① 安藤正人、戦争と平和のアーカイブズ：ヒロシマ・ナガサキ・オキナワを中心に、日本歴史学協会年報、査読無、28、2013、2-14
- ② 政池明、第2次大戦下の京都帝大における原子核研究とその占領軍による捜索(4)原爆研究の記録—その2、原子核研究、査読有、Vol.57 No.2、2013、76-89
- ③ 高橋博子、冷戦下における放射線人体影響研究—マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC、日本の科学者、査読無、2013年1月号 Vol.48、2013、6-13

- ④ 政池明、第2次大戦下の京都帝大における原子核研究とその占領軍による捜索(3)原爆研究の記録—その1、原子核研究、査読有、Vol.57 No.1、2012、85-97
- ⑤ 高橋博子、海外被爆資料についての研究：米軍病理学研究所(AFIP)を中心に、広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告、査読無、第8号2012、43-56
- ⑥ 安藤正人、島根県飯南町「旧赤来町役場文書」調査プロジェクトについて、GCAS Report (学習院大学大学院アーカイブズ学専攻研究年報)、査読有、vol.1、2012、74-81
- ⑦ 安藤正人、沖縄県伊江島の反戦平和アーカイブズ—阿波根昌鴻資料調査会の活動—、歴史評論、査読無、739、2011、50-67
- ⑧ 高橋博子、原爆・核実験被害資料の現状—ABCC・米軍病理学研究所・米原子力委員会、歴史評論、査読無、739、2011、5-19
- ⑨ 加藤聖文、歴史記録としての戦争体験—述記録の証拠制と公開性をめぐって—、歴史評論、査読無、739、2011、36-49
- ⑩ 前川佳遠理、日本占領期「蘭領東インド」の記憶と記録—オランダにおける「戦争の遺産」の記憶化プロジェクト—、歴史評論、査読無、739、2011、66-82
- ⑪ 和田華子、太平洋戦争の開戦と在豪日系企業記録、歴史評論、査読無、739、2011、20-35
- ⑫ 武内房司、ヴェトナム国民党と雲南～諸越鉄路と越境するナショナリズム、東洋史研究、査読有、69巻1号、2010、92-122
- ⑬ 安藤正人、戦争・植民地支配とアーカイブズ—現代的課題との関わりから、人民の歴史学、査読無、180、2009、1-25

[学会発表] (計8件)

- ① 安藤正人、戦争と平和のアーカイブズ：ヒロシマ・ナガサキ・オキナワを中心に、日本歴史学協会年次総会(招待講演)、2012年7月21日、学習院大学
- ② 安藤正人、アーカイブズ学の立場からみたサス研環境アーカイブズの意義、シンポジウム『現代における環境アーカイブズの社会的意義と役割』、2011年12月16日、法政大学サスティナビリティ教育研究機構
- ③ 加藤聖文、原爆被爆者救護活動のオーラルヒストリー、長崎・台湾の事例より、研究集会「日米のサイエンス・アーカイブズを語る」、2010年10月13日、高エネルギー加速器研究機構
- ④ 安藤正人、原爆被害関係資料の調査について、「山口ゼミ」研究会、2010年9月11日、学習院大学
- ⑤ 加藤聖文、大学アーカイブズにおける資料の収集と公開、旧植民地関係資料ワー

- クショップ、2010年8月9日、小樽商科大学
- ⑥ 武内房司、從西江走廊看十九世紀前期的中越關係—以雲南和越南西北部族社会為中心的考察—、2010年6月20日、中山大学(中国)
- ⑦ 加藤聖文、A Report on Making a Collection of a Personal Papers concerning Japanese Colonial Administration, and Opening to the Public in Japan、International Conference 2010 “Taiwan e-Learning and Digital Archives”、2010年3月、Academia Sinica(台湾)
- ⑧ 武内房司、箇舊錫業與世界～兼論近代雲南與法屬越南之間的經濟交流、清代地理國際學術研討会、2009年11月14日、復旦大学(中国)

[図書] (計9件)

- ① 高橋博子、加藤哲郎、井川光雄編、花伝社、原子力と冷戦:日本とアジアの原発導入、2013、273
- ② 松田利彦、陳延媛編、思文閣出版、地域社会から見る帝国日本と植民地、2013、828
- ③ 武内房司、山本英史編、汲古書院、近世の海賊世界と地方統治、2010、171-201
- ④ 武内房司、深沢克己編、勉誠出版、ユーラシア諸宗教の關係史論—他者の受容、他者の排除、2010、89-111
- ⑤ 武内房司、塚田誠之編、有志社、中国国境地域の移動と交流～近現代中国の南と北、2010、117-143
- ⑥ 加藤聖文、清水韶光研究代表、プロジェクト研究「人間と科学」研究課題「戦争と平和」報告書、2010、99-141
- ⑦ 武内房司、赤石書店、越境する近代東アジアの民衆宗教～中国・台湾・香港・ベトナム・そして日本、2010、384
- ⑧ 安藤正人、岩田書院、アジアのアーカイブズと日本—記録を守り記憶を伝える—、2009、115
- ⑨ 武内房司、高柳俊一、松本宣郎編、山川出版、キリスト教の歴史2、2009、210-227

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 正人(ANDO MASAHITO)
 学習院大学・文学部 (大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻)・教授
 研究者番号: 90113422

(2) 研究分担者

武内 房司(TAKEUCHI FUSAJI)
 学習院大学・文学部史学科・教授

研究者番号: 30179618
加藤 聖文(KATO KIYOFUMI)
 人間文化研究機構・国文学研究資料館・研究部・助教
 研究者番号: 70353414

(3) 連携研究者

高橋 博子 (TAKAHASHI HIROKO)
 広島市立大学・広島平和研究所・講師
 研究者番号: 00364117
菅原 寛孝
 沖縄科学技術大学院大学・学長特別顧問・教授

研究者番号: 70015767

政池 明(MASAIKE AKIRA)
 京都大学・理学研究科・名誉教授
 研究者番号: 40022587

清水 韶光(SHIMIZU YOSHIMITSU)
 総合研究大学院大学・名誉教授

研究者番号: 20011744

池村 淑道(IKEMURA TOSHIMICHI)
 長浜バイオ大学・バイオサイエンス研究科・教授

研究者番号: 30023475

永島 広紀(NAGASHIMA HIROKI)
 佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号: 50315181

松田 利彦(MATSUDA TOSHIHIKO)
 人間文化研究機構国際日本文化研究センター・研究部・准教授

研究者番号 50252408

栗原 純(KURIHARA JUN)
 東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号: 40225264

林 雄介(HAYASHI YUSUKE)
 明星大学・人文学部・教授

研究者番号: 00286246

谷ヶ城 秀吉(YAGASHIRO HIDEYOSHI)
 立教大学・経済学部・助教

研究者番号: 30508388

保坂 裕興(HOSAKA HIROOKI)
 学習院大学・文学部・教授

研究者番号: 30219159

森本 祥子(MORIMOTO SACHIKO)
 東京大学・総合研究博物館・特任准教授

研究者番号: 20101587

(4) 研究協力者

前川 佳遠理(MAEKAWA KAORI)
 オランダ国立文書館・プロジェクト研究員
 研究者番号: 30413917